

---

# それは腕だった

岡谷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それは腕だった

### 【Nコード】

N4186F

### 【作者名】

岡谷

### 【あらすじ】

マミとサヤカは大の仲良しだ。いつも二人で遊んでいる。しかし、マミにはサヤカに秘密にしていることがあった。

わたしの名前はマミ。十歳の女の子。

今日もいつものように友達のサヤカと遊んでいる。

サヤカと遊ぶ時はいつもサヤカの部屋の中だ。一緒におしゃべりをしたり、テレビを見たりして遊んでいる。

サヤカと初めて会ったのは五年前のクリスマスパーティーのときだった。

その日以来サヤカとは大の仲良しになったのだ。

わたしには好きな人がいる。

実をいうとその好きな人というのはサヤカのお兄ちゃんなのだ。

名前はマサトさんといって、年は分からないけど今は高校生だとサヤカは言っていた。

マサトさんとは話したことがないのだが、時々サヤカと部屋で遊んでいると様子を見に部屋に入ってくるのだ。その度にわたしはドキドキしてしまう。

ちなみにこの事はまだサヤカには内緒にしている。

最近サヤカは元気がない。

どうやらサヤカは病気がらしいのだ。どういつ病気なのかはよくわからないけど、サヤカと遊べなくてわたしは寂しい。

いつもは毎日のように遊んでいたのだが、最近は週に一、二回しか遊べない。

サヤカと遊べない日、わたしはいつも考え事をしている。

この世界のこと。毎日の生活のこと。鳥や虫たちのこと。サヤカのこと。わたし自身のこと。そして、マサトさんのこと。

それらのことを考えているといつも無性に怖くなってくる。

この世界には、わからないことがたくさんあり過ぎなのだ。

とうとうサヤカは病院に入院することになった。

これではらくはサヤカと遊べなくなると思うと、とても悲しかった。

そしてなによりマサトさんと会えなくなるのが辛かった。

どうすればマサトさんに会えるの？どうすればマサトさんとお話できるの？どうすればマサトさんと仲良くなれるの？

わたしの考え事はマサトさんのことだけとなった。

サヤカは死んでしまった。

わたしは「死」というものがどういうモノなのか、まだよくわからない。

でもサヤカともう会えなくなるといふことはなんとなくわかった。わたしもいつか死んでしまうのだろうか？マサトさんも死んでし

まうの？

もしマサトさんが死んでしまったら、ずっと会えなくなってしまう。

そんなの嫌だ！絶対に嫌だ！

ずっとマサトさんの側にいたい。

でもどうすればいいの？

・・・答えはすぐには見つからなかった。

\* \* \*

妹のサヤカが死んで今日でもう一週間が経つ。

だが、いまだにサヤカが死んだという実感が俺にはない。

サヤカは生まれつき体の弱い子だった。学校へも行けずいつも自分の部屋の中にいた。

俺はサヤカが可哀想でならない。

引っ越してきたばかりの部屋の片づけをしながら俺はそんなことを考えていた。

先日、地元の高校を卒業したばかりの俺は、実家を出て今年四月からこの町で働くこととなった。

初めての一人暮らしは不安だけど、まあなんとかやっていけるだろう。

よくお母さんから「マサトはいつものんきなんだから」と言われていたことを思い出した。自分でも本当にのんきだなと思う。

もう部屋の片づけは残りあと少しだった。あとは今日実家から遅

れて送られてきた段ボールの中身を整理するだけだ。

俺は段ボールを開けた。中にはゴチャゴチャと様々な物が入っていた。

高一の時から使っている筆箱や目覚まし時計。殺虫剤なんかも入っている。

「こんなのいちいち送つてこなくていいのに・・・」

そんなことを思っていた俺はある物に目がいった。

それは赤い車の形をした貯金箱だった。

「あつ！これ持つてくるの忘れてた」

俺は親に感謝し、たった今、文句を言ったことを反省した。

この貯金箱は俺が小学校から使っている思い出の品なのだ。いつも貯めては使い貯めては使つての繰り返しで全然貯まらないのだけど気に入っているので捨てられないのだ。

俺は貯金箱を手にとつて縦に振つてみた。こうやってお金の音を聞くのが俺は好きなのだ。しかし、聞こえてきたのは、いつものお金の音とは違った音だった。

・・・カンツ、カンツ、カンツ。

一体、何の音なんだ？

不審に思い、俺は貯金箱の蓋を外して中のものを全部床の上に出してみた。

百円玉や五十円玉に交じつてそれはあった。

「なんだこれ？」

・・・それは腕だった。もちろん人間の腕じゃない。

それは人形の腕だった。

何でこれが貯金箱なんかに入つてるんだ？

俺はこの腕に見覚えがあった。

これはサヤカが大切にしていた人形の腕だ。そういえばサヤカはその人形のことをいつもマミと呼んでいた。

その人形はサヤカの小学四年の時のクリスマスプレゼントで、友達のいないサヤカはその人形が唯一の友達だった。

俺がサヤカの体の具合の様子を見にいくと、サヤカはいつもその人形と遊んでいた。

俺が何してるの？と聞くとサヤカは、一緒におしゃべりをしたり、テレビを見たりして遊んでいるの、と楽しそうに言っていた。もちろんおしゃべりと言ってもサヤカが一方的に人形に話しかけているだけだ。

そして一週間前サヤカが死んだときに、その人形はサヤカが天国に行っても寂しくならないようにと一緒に棺桶の中に入れたのだ。しかし、その時人形の腕はちゃんと付いていたと思う。

それが何故こんな貯金箱の中に入ってるんだ・・・。

俺は戸惑いと同時に恐怖を覚えた。

\* \* \*

どうすればマサトさんとずっと一緒にいられるの？  
いつまで経ってもその答えは見つからなかった。

どうしてわたしはサヤカやマサトさんみたいに言葉を話せないの  
だろう？もし言葉を話せればこの思いをマサトさんに伝えられるの  
に。

しかし、わたしはその答えを知っている。

それはわたしが人形だからなのだ。

そんなことはずっと前からわかっているのだ。しかし、わかりた  
くないのだ。

神様は何故、わたしに人間と同じ心を持たせたのだろう。

わたしは所詮人形なのだ。話すことも動くことも出来ないのなら心なんていらぬ。

心なんてなければこんなに辛い思いをせずに済んだのに。そんなことを考えていたその時、突然サヤカの部屋のドアが開き、サヤカのお母さんが入ってきた。

サヤカのお母さんはわたしの側に来るとわたしを持ち上げた。そして、たくさんの人間が集まっているところに連れていかれ、その部屋の中央に置かれている大きな箱の中にわたしを入れた。

中にはサヤカがいた。

しかしサヤカの顔はとても冷たい顔をしていた。これが死ぬということなのだろう。

わたしはサヤカの横に寝かされた。目の前にはたくさんの人間の顔があつた。

その中にはマサトさんの顔もあつた。

再びマサトさんと会うことが出来たのだ。しかしマサトさんの顔を見れたのはほんの数秒だった。

箱に蓋がされたのだ。目の前は真っ黒になった。

これからわたしはどうなるのだろう。

真っ暗闇、元氣のないサヤカの横でわたしは不安になった。

・・・どのくらいの時間が経つたのだろう。

体が突然熱くなった。熱いなどの感覚はないのだが、体が燃えているようにとても熱いのだ。

そうか。わたしもこのままサヤカと一緒に死ぬのか。

でも死んだらマサトさんともう会えなくなる。死にたくない。

熱はさらにわたしに襲いかかった。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。



わたしはずっとマサトさんの側にいたいのだ。はやくここから出なくてほ。

しかし、体が動くはずがない。

燃えるような熱さの中わたしの意識はなくなった……。

わたしはどうしたのだろうか？もう死んだのだろうか？

熱はもうなくなっていた。

しかし、何かがおかしい。体が軽いのだ。

なんとわたしは腕だけになっていた。腕以外は熱でなくなっ  
てしまったのだろうか？

もしかしたら神様が腕だけは助けてくれたのか？

そういえばここはどこなんだろう。

わたしは周りを見わたした。

ここはマサトさんの部屋だ。昔、一回だけサヤカに連れてきて  
もらったことがあるのだ。

やっぱり神様が助けてくれたのだ。

しかも腕だけになったわたしは自由に移動できるようになっ  
ていた。

わたしはマサトさんの部屋の中を漂い、あるものを見つけた。

それは赤い車の形をした貯金箱だった。

以前ここにサヤカと来た時にマサトさんが「これはおれの大切な  
ものなんだ」と言っていたことをわたしは思い出した。

マサトさんの大切なものだったら、これはずっとマサトさんの側  
にいますだ。

サヤカがそうだったように、マサトさんが死んだときもきっとマ  
サトさんと一緒の箱に入れるに違いない。そうすれば熱いのは嫌だ  
けどマサトさんが死んでからもずっとマサトさんの側にいることが

出来る。

わたしは貯金箱の側に移動し、今やわたし自身となった腕で蓋を開け、中に入った。

中には丸く平べったいものが何枚も入っていた。

わたしはそれらの上に座り、横に細く広がった窓からマサトさんの帰りを静かに待った。

(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4186f/>

---

それは腕だった

2010年10月19日00時42分発行